『銀の匙』のことば

鈴木英夫

はじめに

中勘助の『銀の匙』は周知のように夏目漱石の推賞により、大正二年（一九一三）に東京朝日新聞に掲載された。のち後篇が書き継がれ、大正四年に同じく東京朝日新聞に掲載される。本稿ではその前篇だけを対象とする。

新聞に掲載された後、『銀の匙』は大正十年（奥付）に岩波書店から単行本（仮綴本）として刊行され、のち岩波文庫に収められた。多くの人々の共感と高い評価を得て今日も尚、文庫本として刊行され続けている。

本稿は、『銀の匙』をことばの面から取上げて、その特徴や問題点について考察しようとするものである。テキストとしては、岩波文庫改版（一九九九）を用いる。

一　会話について

［音声表現］

『銀の匙』は中勘助の自伝的小説であるが、「私」という主人公の目を通して捉えられた世界が語られていく。作者はできるだけ子どもの見た世界を忠実に表現しようとする。そのために、会話にも子どもの言葉遣いが、生の形で描かれる。中には理解しがたい表現もでてくる。

①「えくしょ。女におぶさって万燈ふってやから」（九・24）[注1]

「えくしょ」については、改版では注がついているが、それまでの岩波文庫本にはその注がなかった。これについては、十川信介氏の「『銀の匙』を読む」（岩波セミナーブックス43）に「ええ、くその訛り」（33ページ）とある。「えくしょ」は、三十五回にも出てくる。

②「えくしょ。日本人のくせに毛唐人の名なんが書いてやがら」（三五・84）

当時の子どもたちが、日常良く用いた軽い罵りことばなのであろう。今なら「チェッ」とでもいう表現である。

③見世物小屋の木戸に拍子木と下足札（げそくふだ）をひかえてあぐらをかいてる男は手を口へあてて　ほうばん　ほうばん　と呼びたてる。（六・17）

とある「ほうばん」も分りにくい表現である。これは木戸番の男が客を呼び込むために「さあさあ、評判だよ、評判だよ」と

呼んでいることばであって、子どもには「ほうばん　ほうばん」と聞えたのであろう。木戸番が「評判、評判」と呼んで客寄せをしていたことは、江戸時代のシャボン玉屋が

「ひやうばん〳〵〳〵」[注2]

と言いながらシャボンを売り歩いていたことでも分かる。この「評判、評判」という呼び声が、子ども達には「ほうばん、ほうばん」と聞えたものと思われる。

子どもの音声をそのまま写した例としては他にも次のような例がある。「私」とお国さんがかくれんぼをしていた時のことばであるが、「もういいかーい」という問いかけに対して、お国さんは

④「もいよ」(二八・65)

と答える。これも普通の表現なら「もういいよ」となるところである。

『銀の匙』には、いわゆる江戸訛りを受け継ぐ、音節や助詞の融合が見られる。音節同士の融合は、[ai]→[e:]ぐらいで余り多くみられない。

⑤「弱えな。」(三六・90)

他には「知らねえ」(五一・134)があるぐらいである。

多いのは、語とそれに続く助詞とが融合する現象である。「は」との融合が多い。

⑥「やあ、英語が書いてあら」(三五・84)

「あるは」→「あらあ」→「あら」となったものである。女の子も使う。

⑦「いっちゃいけないってお母様に叱られたから」(五十・130)

先生が生徒にいうことばにも出てくる。

⑧「こりゃ大変。」(三四・82)

⑨「これは面白かないよ。」(三七・92)

日常的な場面では先生も使っていたものと思われる。

⑩「あたいのまねすりゃ大丈夫だ」(三六・88)

「すりゃ」は「すれば」が融合したものである。

融合する形として広く使われていたのは、「〜しちゃう」「〜しちゃった」である。これは女の子も使っている。

⑪「あたしのもこんなになっちゃった」(二九・68)

この言い方は、東京の人々には方言と意識されていないが、東京や関東地方以外の所に住む人々、特に関西の人々にはかなり抵抗のある言い方である。先生が改まった言い方をする時は、当然「〜てしまった」が使われる。

⑫「先生は感心してしまった」(四七・123)

東京方言の音訛現象としては、促音化、撥音化も広くみられる。

⑬「どっこも読めません」(四一・102)

⑭「そんならいっといで。」(三七・89)

「つまんないや　つまんないや」(三七・92)

[男の子のことば]

「私」は「神田のまんなかに生まれた」(七・18)から、幼少の時に接した男の子は下町ことばを使う。のち小石川に移ったが、移った先は「小日向水道町[注3]」であり、小学校は「小日向

水道町服部坂の中腹」にあった「市立黒田尋常高等小学校」[注4]であった。この小学校は、純然たる山の手の小学校ではなく、瓦屋の息子（三五・86）や「伝法院前の魚屋の息子」（三六・87）がいたりする学校であった。従って子ども達のことばも下町ことばが主流であった。

⑩「あたいのまねすりゃ大丈夫だ」（三六・88）

前に挙げた例であるが、魚屋の息子ちょっぺいのことばである。明治から大正期にかけては、下町では男の子も女の子も「あたい」を使っていた。堀辰雄の自伝的小説『花を持てる女』に登場する少年も「あたい」を使っている。

下町ことばよりも広い概念として東京方言がある。どこまでを下町ことばとし、どこからを東京方言とするか必ずしも明確でない面もあるので、以下東京方言という広い視点からみていくことにする。

東京方言を考えるに際しては、主に次の文献を参照した。

○斎藤秀一編『東京方言集』（国書刊行会）
○田中章夫『東京語―その成立と展開―』（明治書院）
○秋永一枝『東京弁は生きていた』（ひつじ書房）
○前田勇編『江戸語大辞典』（講談社）

男の子のことばから東京方言といえるものを拾うと、次のようなものがある。

⑮「おいらのせいじゃなーいと」（三五・85）
⑯「おら知らねえと」（五一・134）
⑰「女におぶさって万燈ふってやがら」（九・24）
⑱「いっしょにしょんべんにいこう」（三六・88）

右に挙げた⑱の例は、子ども同士では「しょんべん」を使うのに対し、先生には

⑲「先生、お小用にやってください」（三六・88）

と「お小用」を使っている。秋永一枝氏は前掲書の中でこの「お小用」も東京弁の一つとして挙げておられる。こうしてみると、東京方言の中にも改まった場面でも使えるものとそうでないものとがあることが分かる。位相の違いがあるといえる。

一方、主人公の「私」は、いわゆる山の手ことばを使っていたものと思われる。東京方言といえるものは、前に挙げた

⑬「どっこも読めません」（四一・102）

という、促音化した例ぐらいである。

⑳「お国さん、お遊びなさいな」（三十・72）

という表現や、地の文の表現からみて「私」は話しことばにおいて「お父様」「お母様」を使い、寝る前に「御機嫌よう」をいわせられる（十七・39）ことから考えると、かなり丁寧なことばづかいをしていたものと思われる。「私」の父のモデルである中勘弥は、明治二十年代は合資洋白会社の取締役[注5]だったらしいので、生活水準も高く、ことばづかいも丁寧だったものと思われる。階層的には上流か中流の上ではなかったろうか。

［女の子のことば］

女の子としてはお国さんとお恵ちゃんが登場する。二人とも山の手ことばを使う。ただ言葉遣いはお恵ちゃんの方が丁寧である。これは家庭環境の違いによるものであろう。「お国さんのお父様は阿波の藩士で、そのじぶん有名な志士であった」

（二六・59）と描かれている。モデルは岡本監輔、旧徳島藩士で独逸協会学校教授や哲学館講師を嘱託されている。千島やエトロフなども訪れた。お恵ちゃんの父親については特に言及されていない。ただ言葉遣いの上からいうと、お恵ちゃんの方が丁寧な言葉遣いをする。「私」の家を訪れて

㉑「ごめんあそばせ」（四五・115）

と挨拶したり、

㉒「昨日はあたくしが悪うございました」（四五・116）

と、「あたくし」や「ございます」を用いている。

二人とも通常は自称の代名詞として「あたし」を用い、主人公の少年に対して「あなた」を使う点では共通している。

お国さんとお恵ちゃんの言葉遣いの違いを明らかにするために、巌谷小波の『五月鯉』に登場する、二つの家庭の令嬢の会話をみてみよう。一方は父親が中国辺の藩士であったが、現在はある省の書記官で畑山駿という。現在は大臣の随行として欧米各国を巡回している。[注6] その娘達が仙子と錦子である。もう一人は谷という「議官の姫君」[注7] で春子という。議官の娘が遊ばせことばを使うのに対し、畑山家の姉妹は使っていない。錦子は姉を「姉さん」と呼ぶが、春子は兄を「兄様」という。畑山姉妹は母親を「おっかさん」と呼んでいる。『五月鯉』の女の子たちが「わたし」を使っている点は、『銀の匙』のお国さんやお恵ちゃんが「あたし」を使っているよりは格式が高いといえる。錦子もお国さん同様「〜ちやった」を使っている。

こうしてみると、『銀の匙』のお恵ちゃんとお国さんの違いと同じ位の差が、『五月鯉』の谷春子と畑山姉妹の間にあるといえよう。全体としては、階層やことばづかいの違いについて、二つの作品ではそれほど差がないように思われる。

［先生のことば］

先生のことばで注意されるのは、生徒に対する言葉遣いである。生徒に対してかなり丁寧な言葉遣いをしている。

㉓□□さんにもひとつしてあげようか。（三七・92）

生徒を「さん」付けにし、「〜てあげる」という言い方をしている。

付き添いの父兄が脇の相手として存在する時には、さらに丁寧になる。

㉔「あなたの年はいくつ」（三三・79）

普通なら

㉕「おまいはなかなか面の皮が厚いよ」（四七・122）

のように、「おまい」か「おまえ」を使う所である。「君」はこの時代は未だ書生ことばとしての性格が強かったから使えない。「おまい」や「おまえ」より丁寧な言い方としては「あなた」しかないことになる。

同じ父親同伴の席で、先生は生徒に

㉖「お父様のお名は」（三三・79）

と尋ねている。「お父さん」ではなく「お父様」を使っているところから考えると、この小学校にはかなり階層の高い家庭の子女も通学していたものと思われる。この黒田尋常高等小学校が黒田長知侯の寄付を基に東京府によって設立されたことが、[注8] 小学校の格式に関わっているのであろうか。当時は一般の家庭

では「おとっさん」「おっかさん」が使われていて、「お父さん」「お母さん」が一般化するのは、明治三十七年から実施された第一回国定読本以降である。まして「お父様」「お母様」はごく一部の家庭で使われていたに過ぎない。当時の小学校の先生が、父兄をどのように呼んでいたか、資料が余りないので明確ではないが、「お父様」の使用はかなり特徴的である。

二　地の文

［口頭語的性格］

子どもの眼を通して描かれた文章ということから、子どもらしい表現ということで、話しことば的表現がふんだんに取入れられている。

その一つが「〜ている」「〜ていた」を、「〜てる」「〜てた」と表現することである。これは角川書店版全集（昭和三十五年十二月刊）収録に際してなされたものである。[注9]

㉗暇になってた父は自分の役目を人にわたして（十・25）

㉘材木をひいてきた馬や牛が垣根につながれてるのを（十一・27）

ただ、現行の岩波文庫本ではこのような形は連体修飾の場合だけで、文末では「〜ている」「〜ていた」となっている。

㉙伯母さんのほうばかり見ていた。（二六・60）

㉚くすくす笑いながら本を読むふりをしている。（四十・100）

文末で「〜てた」という形をとっているのは、次の一箇所だけである。

㉛お互に話のできるくらい近よってた。（四一・103）

文末ではやはり「〜ている」「〜ていた」という形をとるべきだと考えていたのだろう。

口頭語的な雰囲気を出すために、東京方言をかなり地の文に入れて使っている。

㉜その拍子に袂にはいってたお手玉がぱらぱらと地びたへこぼれた。（四五・114）

地の文に使われている東京方言の主なものを挙げておく。

いちんち（一日）　棒ちぎれ
おんなじ　めっかち
読みっくら　やっぱし
こそぐる　人よりか
こないだ　埒もない
さんざ　せびる
じれる　たんと
とんだ　ちっと
のっぴき　ちょいと
ひよわい　つっぷす
べそ　年弱
本意ない　とつおいつ

三　語法

『銀の匙』で問題となる語法のいくつかについて以下述べることにする。

［サ変動詞］

サ変動詞については、まず打消表現が注目される。サ変の打消表現として明治以降用いられるのは

しない
せず（に）

のいずれかが普通である。「しない」が口語的で、「せず」が文語的である。しかるに、明治期や大正期にはいわば過渡的な形として

しず（に）
せない

という形がみられることがある。『銀の匙』には「せない」はみられないが、「しずに」は使われている。

㉝たまに顔をあわせてもにこりともしずに隠れてしまう。（四九・128）

もちろん「せずに」も用いられる。

㉞明る日は頬をはらして食事もせずにじっと寝間にひっこんでたら（三三・78）

用例数からいうと「しずに」の方が多い。

しずに　4例
せずに　1例
せず　2例

次のような「し得ずに」（2例）「し得ない」（1例）という打消しの可能表現も、「しずに」の多用を支えているのであろう。

㉟私は彼らのように大胆にはし得ずにすこしはなれてぼんやりと絵を眺めていた。（三七・92）

サ変動詞の用法には、「〜をする」という形で、特定の動詞の代用をするものもある。

㊱この子は将来丈夫になって仕合せをする（十二・30）

「仕合せをする」で「仕合せになる」という表現の代りをするわけである。同じような例が、他にもある。

㊲ぴいぴいいう風船の音、物うりの呼び声などが砂ほこりのなかに堪えがたい騒ぎをする（二一・49）

㊳なんともいえない混乱した気もちをしながら伯母さんに手をひかれて学校へ行った。（三三・80）

㊴ひとりの先生がきていきなり私の帯をつかまえ　やっ　と掛声をして宙にさしあげたもので（三四・82）

㊲は「騒ぎを起す」、㊳は「気もちを抱く」、㊴は「掛声をかける」とでもいう所であろうか。

「泣きじゃくる」も「泣きじゃくりする」という形で表す（3例）。

㊵くやしそうに泣きじゃくりしてひとのするままになってたが（四三・110）

「する」という動詞を重視していたといえる。

［もので］

「もので」の使い方にも特徴がある。

㊶彼は近処に友達がないもので学校から帰ると私を誘いにきて裏で遊ぶ。（四九・126）

この「もので」は「ので」に置き換えることができる。「ので」と同じように、前件と後件の間に論理的関係があり、原因や理由を表す。

日本国語大辞典（二版）でも、「もので」は「名詞『もの』に断定の助動詞『だ』の連用形の付いた」連語であるとし、①「反語を表わす」場合と②「原因・理由を表わす」場合とがあるとする。②の用例として『銀の匙』から

㊷伯母さんは苗売りにまんまと一杯くわされたのをくやしがってろくに世話をしてやらなかったものでみんな落ちてしまった。（二十・48）

の箇所を引いている。『銀の匙』以後の例としては井伏鱒二の『引越やつれ』から例を取っているが、問題は『銀の匙』以前の例として挙げた、18世紀のものとされる朝鮮語資料『隣語大方』の例である。

事の崩ぬ先に慎でこそやふ御座りまする　既に崩た後は破た器を合て見る様なもので　役に立ませぬ

この「もので」は、『銀の匙』の場合とは異り、原因・理由を表してはいないと思われる。一語として融合しているのではなく、名詞「もの」と断定の助動詞「で」が結び付いて「〜であって」という意味を表わしている。「既に失敗した後では、壊れた器を繋ぎ合わせるようなものであって何の役にも立ちません」という意味に解すべきである。

「もので」を原因・理由を表わす連語、あるいは助詞として用いるようになったのは、恐らく明治以後であろう。ただ、どのような経緯からそうした連語（助詞）が成立するに至ったかは明らかでない。

「もので」は「ので」と同じように使われるが、もちろん用例は「ので」の方が多く、

もので　15例
ので　39例

となっている。また、前件と後件との論理的関係は「ので」の方が強く、「もので」は継起的前後関係を表している傾向が強い。[注10]

㊸執念ぶかく追っかけて（犬じらみを・筆者注）ぶつけたものでお恵ちゃんは身をかわすはずみに膝をついてわっと泣きだした。（四三・110）

［らしい］

「らしい」も、明治・大正期には今日とかなり違った使い方がなされていた。[注11]『銀の匙』にも、そうした例がいくつかみられる。

㊹日に日に新しい住居が出来てゆくのを不思議らしく眺めていた。（十一・28）

㊺「ゆんべはふたあつもじっきにおぼえた」なぞと自慢らしく話したりした。（十八・44）

いずれも現在なら「不思議そうに」「自慢そうに」というところである。

むすび

『銀の匙』は、少年の目を通してみた世界を、できるだけ忠実に表現しようとした作品である。

会話や音声表現を描写するに当って、写実的にありのままに表現しようとする余り、分りにくい表現になることもある。

「えくしょ」は「ええ　くそ」という軽い罵り言葉であり、「ほうべん　ほうべん」は「評判　評判」という呼び込みのことばである。

神田時代のまわりの子どものことばはまったくの下町ことばであり、小石川時代の小学校の子ども達のことばも、東京方言（下町ことばを含む）である。

主人公の「私」は山の手ことばを用い、「お父様」「お母様」を使い、寝る前には「ごきげんよう」と挨拶する。こうした言葉遣いをする家庭が、明治後期にどのくらいあったのだろうか。

学校の先生も、「私」が父に連れられて挨拶に行った時、「お父様のお名は」と「私」に尋ねている。この時代、「お父様」がこれほど一般的であったのか、いささか疑問である。

この先生は、主人公に対して「あなた」を用いているが、普通は「おまえ」か「おまい」であったと思われる。

主人公は、女の子と話す時は「あなた」を用い、女の子も「あなた」を使っている。

お国さんとお恵ちゃんとでは、お恵ちゃんの方が丁寧で遊ばせことばや「ございます」「いたします」を使い、改まった時には「あたし」でなく「あたくし」を使っている。

地の文の語法としてはサ変動詞が特徴的である。「せずに」より「しずに」を多く用いる。

「仕合せになる」というところを、「仕合せをする」、「気もちになる」を「気もちをする」というようにサ変動詞で表すことも特徴的である。

「もので」を「ので」と同じように原因・理由を表すのに使う。この用法は、恐らく明治以降のもので、それ以後使われるようになった言い方と思われる。

「らしい」の使い方にも、同時代の小説と同じように、今日の「らしい」とは異なる用法がみられる。

こうした問題以外にも語彙に関する問題や表現についても考察すべき点があるが、それについては稿を改めて論ずることにする。

注1　（漢数字は回を表わす。算用数字は文庫のページ数である）

2　黄表紙『心学早染艸』（日本古典文学大系・200ページ）

3　堀部功夫「『銀の匙』考」116ページ

4　注3に同じ。240ページ

5　注3に同じ。122ページ

6　川上眉山・巌谷小波集（明治文学全集）195ページ

7　注6に同じ。202ページ

8　注4に同じ。

9　注3に同じ。53ページ

10　「もので」については『日本語文法大辞典』にも記載がある（久保田篤執筆）が、この語については稿を改めて論ずることにしたい。

11　鈴木英明「明治以降のラシイの表現」（国語国文　57巻3号）

（本学非常勤講師）